

はじめに

入不二基義

私は哲学を専門とする大学教員であるが、大学院生とオーバードクターのころ、駿台予備学校で英語を教えていた。哲学的な内容の英文を選んで自分の講座のテキストを作成したり、英語の教え方の中に哲学的な視点を忍び込ませたりして、私は予備校で教えることの楽しさにはまっていた。その当時の駿台英語科主任で、受験英語の世界の神様的な存在として君臨していたのが、故・伊藤和夫先生だった*。

先生と私は、親子ほどの年齢差と立場上の高低差がありながら、不思議なほど深い交流をした。二人とも根っからの「哲学体質」であり、その「体質」の者どうしのお喋りや議論でしか満たすことのできない欲求を持っていた。英語の教え方や予備校内の政治や人間関係のすべてが、その欲求の格好の題材となって、私たちは何度となく酒席を共にし、議論を重ねた。

大学に職が決まって駿台を辞めるときに、私は『<思考する>英文読解』（駿台文庫・絶版）という参考書を記念の意味もこめて出版してもらった。その序文には、伊藤先生の推薦のことばが記されている。一部引用しよう。

入不二基義氏は、私が信頼し、嘱望する、哲学の若き学徒です。哲学と英語は無関係のように思えるかもしれませんが、言葉は、あらゆるものを映す可能性を秘めている点で、世界と宇宙の鏡です。哲学は世界と宇宙を、最も包括的体系的にとらえようとする試みですから、哲学の中には、言葉—ロゴスに対する深い関心が昔からあったのです。

本書『英語で読む哲学』のいちばん古い出発点は、きっと「あの頃」にまで遡るだろう。本書のコンセプトは、「英語で書かれた優れた哲学論文を、英語・哲学両方の解説を加えながら精読する」であるし、しかも、本書の担当編集者は佐藤陽二さんだからである。佐藤さんは、伊藤先生がもっとも頼りにしていた編集者であり、先生の『英文解釈教室』（研究社）を始めとする多くの名著を世に出した方である。「あの頃」にまで遡る三人のつながりが、あたかも本書を産み出したかのようなのである。

「私が信頼し、嘱望する、哲学の若き学徒です」と伊藤先生から書いてもらった私も、すでに五十歳半ば近くになり、私が出会った頃の先生の年齢に近くなった。そして、こんどは私自身が「本書の五人の執筆者は、私が信頼し、嘱望する、哲学の若き学徒です」と紹介する側になった。

北野安寿子さん、小池翔一さん、小山悠さん、壁谷彰慶さん、今村健一郎さんの五名は、研究会でいっしょに活動している若手の哲学研究者であり、自ら執筆を希望して手を上げてくれた積極的な五人である。扱う英文の選定に関しても、彼らの鑑識眼に依るところが

大きい。ふだん自分の研究の一作業としてやっているような「論文読み」や「議論の整理や俯瞰」を、一般の読者にも伝わるような形で呈示すること。これが、今回彼らに取り組んでもらった課題である。彼らの適切なガイドに助けられて読むことによって、一人では読み解けないレベルの英文でも、霧が晴れるように明瞭に分かるという体験を、読者のみなさんに味わっていただけないかと思う。

先ほどの引用文で、伊藤先生は「言葉は世界と宇宙の鏡である」と書いていたが、私は「言葉は思考と感受性の身体である」と付け加えてみたい。

身体は、重さや抵抗を持つからこそ、所作や運動を紡ぎ出せる。重さや抵抗があることは、動くための制約にもなるが、まずは動くための可能性そのものである。同様に、言葉が「重さや抵抗」を感じさせる物質性を帯びていることは、思考や感性にとっての単なる夾雑物ではなくて、思考し感じるための可能性そのものである。

特に、母語ではない言語の場合には、とりわけその「重さや抵抗」は大きい。外国語を学ぶことの意味の一つは、その「重さや抵抗」を利用して、粘度の高い媒体の中で、思考や感受性を鍛え上げていくことにあるだろう。本書は、その格好の素材を提供する。

本書で扱う五つの英文は、どれも本格的な「哲学の文章」そのものであって、お子様向きにリライトされた文章ではない。しかも、一流の哲学者たちが手加減なく思索している場面が展開する。だから、「易しく」「分かりやすい」はずがない。かなりの「重さや抵抗」が感じられるだろう。しかし、「易しく」「分かりやすく」できるところは、そのための工夫を解説者の五人が施してくれているので、安心して「重さと抵抗」を楽しんでいただきたい。

第一章から第五章まで、比較的読みやすい文章から始めて、英文と哲学の難度が上がっていく順序に並べてある。しかし、各章の英文はそれぞれ独立の作品であるし、解説も各章独立に読むことができるように書かれているので、興味を持った章から読み始めることができる。あるいは、「心」と「私」というテーマのつながりで第二章と第五章をいっしょに読んだり、「徳」の問題つながりで第三章と第四章を比較したり、という読み方もできるだろう。でもやはり、第一章の英文が、最初に読むのに相応しい気がする。

第一章のマイケル・サンデル『正義』は、私も今回初めて英文で読んだ。もちろん、彼が講義の名手であることは知っていたが、書き手としても名手であることが分かった。その英文は端正で読みやすく、文章構成も巧みである。北野安寿子さんは、そのサンデルの良さを、より際立たせてくれる形で解説してくれていて、「正義」をめぐる哲学的な思考への良き案内人を務めてくれている。北野さんの解説・訳には、先行する翻訳への「批判」も含まれているので、より踏み込んで考えてみたい人には、比較してみることをお勧めしたい。

第二章のギルバート・ライル『心の概念』は、「心の哲学」と呼ばれる哲学領域の古典で

ある。しかも、小池翔一さんが選んで解説してくれた箇所は、「意志作用などというものはない」ことを論証しようとする有名な議論である。ライルの議論は、特に難解な用語もなく、また専門的な知識も必要とされないので、純粋に哲学的な思考をすることがどういうことかを知るための、いい見本になっている。小池さんは、ライルの思考に寄り添いながら、軽快な解説を展開することによって、哲学をすることの楽しさをうまく伝えてくれている。

第三章は、アラスデア・マッキンタイアの「美德とは何か」（『美德なき時代』）である。「美德」は、「悪徳」以上に私たちにとって馴染みの薄い概念になっているかもしれない。しかし、小山悠さんの「はじめに」の解説が、マッキンタイアの思索が「道徳」の深部を抉るような強烈なものであることを教えてくれるので、英文を読む前から楽しみが増し期待感が高まることだろう。マッキンタイアの英文は、けっして読みやすいものではないけれども、小山さんの解説に助けられて読み進めていくと、自らも「内的価値」について考え始めていくということになるかもしれない。

第四章では、「脱道徳家 vs 人間らしさ」と題して、バーナード・ウィリアムズの「脱道徳家」の読解が展開される。ウィリアムズは、倫理学（道徳哲学）をよくある「大理論どうしの対決」という形では論じない。その細やかさや低空飛行性が、逆に彼の議論を捉えにくくもする。しかし、壁谷彰慶さんが、「往路」「折り返し点」「復路」というアウトラインによって議論の見通しをよくしてくれているし、壁谷さんの全編を通しての丁寧な解説が、「脱道徳家」という思考実験の意味を明晰にしてくれる。ウィリアムズの議論の面白さが、「何となく分かる」から「よく分かる」へと変わるだろう。

第五章が、（英文としても、哲学の議論としても）おそらく最も難しい。エリザベス・アンスコム「一人称」という論文である。アンスコムの主張は、『私』という一人称代名詞は指示対象を持たない」という一言でまとめられるだろうが、この見解の持つ射程の大きさは計り知れないし、そこに至る議論は難解である。今村健一郎さんだからこそ、この難解な論文を一般読者に解説するという困難な課題を果たすことができたのだと思う。

ちなみに、私の指導教官であった故・黒田亘先生が、大学院の演習でこの「一人称」論文を扱ったことがあり、まだ大学院に入ったばかりだった私も、その演習に出席していた。あれほど高水準の会話が何時間も飛び交い、緊張感で空気まで薄くなるような「議論空間」は、あの頃の黒田ゼミにおいてのみ出現した希有な瞬間だった（といま振り返って思う）。今村さんの指導教官は一ノ瀬正樹さん（東京大学）だったと聞いているが、その一ノ瀬さんの指導教官が、やはり黒田先生だった。ここにもまた、「あの頃」にまで遡るつながりが、感じられる。

本書が想定している読者層は、「本格的な哲学の英語論文を読んではみたいけれども、自分の力だけで読めるかどうか不安である」という人たち、あるいは「手応えのある議論を展開している英文に挑戦することで、英文読解力をブラッシュアップしたい」という人たちである。たとえば、大学院進学を目指している大学生、哲学に興味を持っている大学院生、

そして、知的な関心と英語を読む訓練を結びつけたいと思っている社会人の人たち、である。本書に掲載された英文を、ガイドなしで読み解ける水準にまで到達できれば、もうそれ以上議論構造が難しいために読み解けないような英文に出会う可能性は、ほとんどゼロになるだろう。

2012年9月記

* 故・伊藤和夫先生については、『予備校の英語』（研究社）を参照。